僕とお姉ちゃん（師匠）達とのヒーローアカデミア

緑谷が強いのが大好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人は生まれながらに平等ではないこれが齢４歳に知った社会の現実。そしてそれが僕の大きな転機であった。

事の始まりは中国軽慶市、〝発光する赤児〟が生まれたというニュースだった！

はじめて投稿なので暖かく見守ってくれたら嬉しいです

目次

1話 ―――― 1
2話 ―――― 12
Kとの再会／Oとの出会い ―――― 27
少・年・変・身 ―――― 44
ヒーロー・タイム ―――― 55
雄英受験 ―――― 71
個性把握テストが来た～!! ―――― 84
戦闘訓練 ―――― 102

1話

時は流れて僕、緑谷出久４歳の個性把握診断の時医者から言われたのは「動物」という個性だと言うこと。お母さんは、「個性が出てよかったね！」と言ってくれた。

僕も「これでオールマイトみたいなヒーローになれるかな？」とお母さんに聞いた。すると「なれるよ出久なら」と言ってくれた！保育園に行くとかっちゃんは「一緒にヒーローになるぞ！」と言ってくれた。学校から家に帰った。家の前に知らない人達がいた。

「母親は殺したが肝心の子供がいないじゃないか！」

えっ？お母さんが死んだって？こいつら何を言っているんだ？

僕は物影に隠れてその場をやり過ごした。謎の人達は程なくして立ち去って行った。僕は家の中に入った、お母さんの姿は無く赤い赤い血だけがあった。僕は泣いたとてもとても泣いた。一時間ぐらいした時男の人がいた。「どこから入ってきたんだ？」と気になったがその後の記憶は無い。

目が覚めるとどこかの研究室の中にいた、さっきの男の人が入ってきた周りにたくさんの薬や器具（かなり怪しい）があった僕は周りを見た（どうやら拘束されているらし

い)。すると男が
「やあやあ、起きたみたいだね緑谷出久君」
「君には私の憎き忍び共を殺す為の人形になってもらうよ」
　僕は
「僕の体に何をするの!そもそも忍びってあの忍び?でもこの世にいるの?だったらブツブツ」
「ええい!うるさい!そんなことはどうでもいい!」
「お前はおとなしく実験台(モルモット)になっていろ!」
「あががががが」
　そう男の人が言った時体中に痛みが駆け巡ったナニコレイタイイタイイタイイタイ!!!!ヤメテヤメテ
「な…ん…で」
　こんなことするの?と言おうとしたが意識を失った
　朝から夜まで薬を打たれた毎日毎日続いたそんな生活が6年続いた薬の中身は「個性を与える」薬だったそのせいで僕には新たに2つ個性が出たそれは「自然属性」と「武器作製」だった「自然属性」は自然つまり火や水、風といったものが使えるという個性だった、「武器作製」は自分が見た武器をそのまま作れるということだ、しかも何から何

まで同じに作れるのだ。
「これでアイツらに復讐することができる」
「私はアイツらに復讐をします」
「ここまで長かったお前達行くグハッ」
　男の人が言い終わる前に何かが入ってきた
「お前達の野望もそこまでだ！」
「ふん、一人で何ができる！」
「お前達なんぞ一人で十分だ！」
　その入ってきた白髪の人は言った通り一人で男の人達を倒していった
「くっここまでかさらばだ！」
「おい！待て！クソ取り逃がしたか」
「きみ！大丈夫かい！」
「わたしの部屋に行くぞ」
　男の人は優しく僕の手を握ってくれた意識を失ったいつまで寝ていたのだろうか目を開けると見慣れない天井があったそうだ僕は白髪の人に助けてもらったんだっけ見回すと白髪の人がいた
「よく眠れたかい？」

「はい助けていただきありがとうございます」
「さて少年、わたしはきみを助けるためにあそこに行ったあのままではきみは対忍者の兵器になっていた」
「質問だ少年きみはその力をなんのために使う」
　僕は！僕は！
「この力を！人を助けるために使いたい！もうこれ以上失いたく無い！この力で！この個性で！ヒーローになりたい!!!」
「……少年よく言ったならその力を正しきことに使いなさい」
「はい！」
「それとわたしのことは霧夜と呼びなさい」
「お父さんって呼んでもいい？」コテン
「グッまあいいだろう（何だ今の可愛さは！）」
「ありがとう！お父さん！」
「ならばまずは体作りのための修行だ」
「はい！お父さん！」
　この日から僕の修行（軽めの地獄）が始まった最初は全然だったけど日を越すたび体が引き締まっていった

その修行が2年経ったある日
「もう私から学ぶことはもうない」
「えっ！」
「これからはわたしの生徒たちと修行してもらうぞ」
「わっ分かりました！」
そう言いながら学校ー国立半蔵学院まで来た
「？お父さんここって半蔵学院？」
「ああそうだ出久ここでわたしは忍クラスの担任をしている」
お父さんは今でもすごい忍者だから半蔵さんから教師にスカウトされたみたいでここで教師をしている
「よし出久気配を消して入れ」
「？なんで？」
「ここは出久が普通に入ると怪しまれるからな」
「わかったよ！お父さん！」
僕はお父さんに言われたとおり気配を消した
（流石だな出久私でも気を抜くとわからないぞ）
と霧夜は自分の息子の成長を実感していた

「出久自分のタイミングでいい消したまま入りなさい」
　そう言うと霧夜は隠し通路に入っていった
「よし僕も行くぞ！あっ挨拶はちゃんとしないとね」
　忍部屋
「おはようございます霧夜先生」
　と黒髪を後ろに長く伸ばした女子が言った
「ああ斑鳩全員いるな」
「霧夜先生ここらへんよく機嫌が良いよな」
「そうだよね霧夜先生変わったよね」
「うんうん」
「おい静かにしてないと修行が厳しくなるぞ」
　と葛城、飛鳥、雲雀、柳生が言ったとそこに
「あのーいつまでここで立っていたらいい？お父さん？」
「「「「!?」」」」
　言葉を言うまで誰も気付かなかったいや気付けなかったのほうが正しい飛鳥や雲雀はいいとして斑鳩や葛城、柳生までもが気付けなかったのは異常であった
「ひっ！」

全員が出久を見たため霧夜にしか心を開いていなかった出久は
「お父さん！」
霧夜の方に駆けた
「「「「お父さん!?!?!」」」」
とそこにいた５人全員が言った
「お前たちには言っていなかったな私の息子の緑谷出久だほら出久も」
「うん、初めましてお父さんの生徒さんたち僕は緑谷出久と言いますよろしくお願いします」ペコッ
「ひだりから斑鳩、葛城、飛鳥、雲雀最後に柳生だ」
「「「「よろしく／お願い致しますわ／な／ね／だ」」」」
「うん！お姉ちゃんたち！」
「「「「お姉ちゃん？」」」」
「え？いや…だった？」コテン＋ウル
「いやいやいいよお姉ちゃんでも！ねっ！ねっ！」
「「「はい／おう／うん／ああ！」」」
「本当に？」
「「「「可愛すぎる」」」」

「お前たち」
「その気持ちよくわかるぞ」ボソッ
「霧夜先生も？」
「ああ」
「最初はあれで何回か死にかけたからな」
「霧夜先生が！」
「死にかけるって」
「なぁ出久？」
「何？葛城お姉ちゃん」コテン
「グハッ」
「「「葛城／姉／さん！」」」
「葛城お姉ちゃん！待ってて！」
　出久が葛城を葛城お姉ちゃんと言ったら葛城は鼻血を出し膝から崩れ落ちた
「来て！鳳凰！」
「「「!!!」」」
「えっ！鳳凰って斑鳩さんの秘伝動物だよね！」
「鳳凰！『フェニックス・ヒーリング！』多分これで大丈夫だと思うけど」

「う…うーんあっあれアタイはたしか鼻血を出して」
「葛城さん大丈夫ですか？」
「ああ逆に体が軽いぜ」
「お前葛城に何をした！」
「ひっ！お父さん怖い」
　柳生の言葉に出久は怖がった
「柳生ちゃん出久くんが怖かってるよ！」
「それに出久くんは葛姉を治してくれたんだよ！」
「えっとね僕のフェニックス・ヒーリングは相手の怪我や血が無くなっても治すことができるんだあと少しの間だけ身体能力を上げることもできるよ」
「そんなこと信じられるか」
「柳生これは本当だ」
「俺もこれで何回か救ってもらった」
「そうか」
「すまなかったないきなり怒鳴って」
「許してくれるの？柳生お姉ちゃん」コテン
「グハッ」

「や柳生お姉ちゃん！」
「あのーよろしいですか？出久さん」
「なあに斑鳩お姉ちゃん」
「さっき『鳳凰』と言いましたねあれはどういう事ですか？」
「あれは僕の個性の動物だよ」
「僕はね空想上の動物でも出すことが出来るしその動物の能力も使う事が出来るんだ」
「そうですか私たちは忍になる過程で個性を失ったので」
「ごっごめんなさい！僕知らずに…」
「いいのです過ぎたことなので」
「出久さんは忍者になりたいのですか？」
「ううん僕はヒーローになりたい」
「ヒーローですか」
「うん！お父さんが僕を助けてくれたように僕も人を助けたい」
「霧夜先生が出久くんを助けたって？」
「お父さん言ってもいいかな？」
「ああ」
　出久はすべてを彼女達に話した

「出久くんと霧夜先生の出会いにそんなことが…」
「お父さんが助けてくれなかったら多分お姉ちゃん達とは違うところで出会っていたかもしれないだからお父さんにはとても感謝しているだからこそ僕はその恩返しを出来たらいいなと思っているんだ」
「ちょ霧夜先生、出久めっちゃ良い子じゃねぇか」
「出久くん！」ギュッ
「えっえっ雲雀お姉ちゃん？（？　？・？―？・？　？）？あっ！当たっているよ？（？・？―？・？　？）？くっくるしい」
「雲雀やめてやれ出久は女性に免疫力が皆無だから」
「でも出久くんかわいいから」
「「「「それは間違いない／ですね／な！」」」」
「ちょお父さんまで！」
　こうして僕の1日は終わった

2話

「出久くん今日はね私達の友達を紹介するね」
　と飛鳥お姉ちゃんが言った友達か僕にもいたね今頃どうしているのかな？などと思っていると
「こっちから『焔紅蓮隊』『死塾月閃女学館』『秘立蛇女子学園』のみんなだよ」
「僕は緑谷出久です！お姉ちゃんたちよろしくね！」ニコッ
『グハッ』
　全員からそんな声が聞こえた
「えっえーと？」
「きっ気にするな（飛鳥からは聞いていたが凄まじい威力だな）」
　この時全員がそう思ったすると
「なんやワシには感情が無いのに何故か護りたくなってしまう」
「飛鳥お姉ちゃん緑色の髪の人って感情が無いの？」
「うんまあね日影ちゃんって言うんだよ焔紅蓮隊の1人だよ」
「ねーねー日影お姉ちゃん」

「ん何や？」
　僕は感じたまでのことを言おうと思う
「日影お姉ちゃんは焔紅蓮隊のことをどう思っているの？」
「それは居て胸のところが温かい」
「うん！それが日影お姉ちゃんにとっての感情だと思うよ」
「だって日影お姉ちゃんずっと楽しそうに見てたから！」
「!?」
「これがワシの感情なんか？」
「うん！そうだと思うよ！僕は！」
「ありがとーな出久ワシはもうちょっとだけ感情を知りたいわ」
　日影お姉ちゃんなら簡単だと思うよ？と言いそうになるがそれは日影お姉ちゃんがすべきことだと思ったから言わなかったそれから自己紹介が始まった
「私は飛鳥のライバルでありこの焔紅蓮隊のリーダーの焔だよろしくな」
「私はここの一応副リーダーの春花よあとわたしのことはお姉様と呼びなさい」
「私は詠と申します好きな食べ物はもやしですわ出久くんはもやしは好きですか！」
「詠さん引いてまうで。ワシはいいやろあとよろしく頼むで」
「わたしは未来よ一応小説を書いているわよろしくね」

「うん！よろしくね！焔お姉ちゃん！春香お姉様！詠お姉ちゃん！日影お姉ちゃん！未来お姉ちゃん！」
「詠お姉ちゃん僕も好きだよもやし」
「あと未来お姉ちゃん」
「ん何出久」（お姉ちゃん呼びされた！）
「もしかして『仏麗』ていう小説家さん？」
「えっ！なんでわかったの」
「だって『未来』ていう名前を英語に直すと『ｆｕｔｕｒｅ』でしょさらにそれをローマ字で読むと『ふつれ』『仏麗』てなるから。違うかな？」
「あ、当たりよ」
　この時大半が出久の頭の回転が速いことが分かった
「次は私たちですわ」
「私は月閃のリーダーの雪泉と申します秘伝動物は蜘蛛です」
「わしの名は夜桜じゃわしには兄弟が多いからまた一人増えたみたいじゃ」
「わたしは四季でーす趣味は般若心経を読むことだよ出久ちんよろしくねー」
「我は叢と申すお面は気にしないでくれこれが無いと上手くしゃべることが出来ないし我の醜い顔を晒したくないのだ」

「出久さん本当はすごく可愛らしい顔なのですよ」ボソッ
「分かっていますよ」ボソッ
「？」
「だってあんなかわいい声の人が可愛くないはずがありませんからね」ボソッ
「ありがとうございます」ボソッ
「美野里はね美野里って言うんだよ後でいっぱいお菓子食べようね」
「美野里さんそれはだめですよ」
　と楽しげに喋っていた
「うん！よろしくね！雪泉お姉ちゃん！夜桜お姉ちゃん！四季お姉ちゃん！叢お姉ちゃん！美野里お姉ちゃん！」
「叢お姉ちゃん自分のタイミングでいいから外している時の顔見してね」
「感謝する出久」
「だったら今見したらいいじゃん！」
　美野里が後ろから叢のお面を素早く取った
「わわわ！み美野里さんおおおお面を早く返してくださいいいいい！あああすいませんすいません！こんな醜い顔を見ないでくださいいい」
　と言うが

「うん！やっぱり叢お姉ちゃんはかわいいね！」
「!!」？（？　？・？―？・？　？）？
「どうしたの？」
「我の顔がかかかかわいいわけが」
「どこが可愛くないの？少なくともここにいる人達はそんなこと思っていないよ」
「かっ感謝する出久でもまだ」
　なら！と雪泉がお面を斜めにした
「これでどうですか」
「ありがとうございます雪泉さん」
　これで月閃も終わった次は
「最後は私たちだ」
「私は蛇女の雅緋だそこにいる焔のライバルだよろしくな」
「僕は雅緋の親友の忌夢だそして紫の姉だよろしく」
「わ私はえーとその…忌夢お姉ちゃんの妹のむ紫ですえーとあなたも仏麗さんのファンですか？」
「私は両備よそこのバカ犬の妹よろしく」
「きゃうーん！両備ちゃん！両奈ちゃん気持ちいいよ！」

「こら！バカ犬！早く自己紹介しなさいよ！」
「…分かったよ…両備ちゃんの姉の両奈ちゃんだよ！よろしくね！」
「うん！よろしく！雅緋お姉ちゃん！忌夢お姉ちゃん！紫お姉ちゃん！両備お姉ちゃん！両奈お姉ちゃん！」
「うん僕もね紫お姉ちゃん、仏麗さんの小説を読んでるよ」
「紫お姉ちゃんってもしかしてキュートクイックリー？」
「どうして分かったの？」
「僕も投稿されたらすぐに読んでも途中からもう1人読んでいるから」
「じゃあ出久くんはオールグリーン？」
「うん！そうだよ！」
「やっぱり私よりも早く読んでいる人ってその人だけだから！」
「ちょちょっと！2人で盛り上がらないで！あと恥ずかしい」？（？　？・？―？・？）？プシュー
「スッすみません」
「これで全員だな」
「出久には個性があるんだろ？どんなのなんだ？」
と焔お姉ちゃんが聞いてきた

「僕の個性は動物と自然属性と武器作製だよ」
「動物の個性は空想上の動物でも呼び出せれるし自分の力にすることも出来るよ」
「アタイはそれで助かったなサンキューな出久！」
「自然属性は一応自然界にあるもの例えば氷とか土その他色々その中に何故か火があるんだよね多分個性強化の薬を投与されまくったからかな」
「ふむ」
　と斑鳩は考えていた
「最後は武器作製これはもうその名のとおりです見た武器をそっくりそのまま作ることが出来ます」
「皆さん聞いてください」
　斑鳩がずっと考えていたことを話し始めた
「出久さんは将来ヒーローになりたいそうです」
「霧夜先生からは『出久に俺から教える事はもうない。だがお前たちなら教えられることもあるだろう』と言われました」
「斑鳩お前…まさか！」
「はいそのとおりです」
「どういう事なの柳生ちゃん」

「雲雀こういうことだ」
「斑鳩は俺たちで出久を育てる」
「つまり出久に俺たちの戦闘技術…秘伝忍法を教える」
「こういう事だ」
「そーゆーことかー」
「ありがとね！柳生ちゃん！」
「ああ俺は雲雀のためならこのくらい」
「だが斑鳩」
「秘伝忍法には巻物が必要だ」
「どうするんだ？」
「そこで作製の個性です」
『？』
「もしかして斑鳩お姉ちゃん？巻物を僕が『武器』として認識させるってこと？」
「はいそのとおりです」
「なぁ斑鳩？」
「なんでしょうか？焔さん」
「秘伝忍法を教えるここまではいいだろうだが『絶・秘伝忍法』はどうするんだ？」

「私や飛鳥、雪泉、雅緋は姿が変わる」
「だから私達が教えるのです」
「出久さんは3年後受験生です」
「受験先はあの雄英だそうです」
「3年もあれば出久さんは絶・秘伝忍法もきっと会得するでしょう」
「どうしてそう言い切れるんだ？」
「出久さんは才能の塊です」
「私達は身に締みています」
「何故なら気配を全く出さずに私達の忍部屋に入ることが出来ていましたから」
『え～～～～～～～!!!!』
「い斑鳩お姉ちゃん…かいかぶりすぎだよ」
「いいえ！そんなことありません！」
「修行すれば必ず！」
「皆さんもそう思っていますよ」
『うん！』
「じゃあさっそく
「ねぇもう出て来ても良いんじゃない？」

出久くん?何言っているの?」
「最初から柱の所と壁、天井に隠れている人達がいるんだ」
「1人はお父さんって分かるけど……あとの人達は分かんない」
そう言うと壁の所から霧夜が出てきた
「流石だな出久」
「私や凛、大道寺までわかるとは」
「流石は霧夜の息子だな」
「まさか我まで見破るとは」
その後から天井からは凛が、柱からは大道寺が出てきた
「えっえっえ〜〜〜〜!!!」
「私達は全然分からなかったんだが」
「これが出久の才能だ」
「お前たちもわかっただろ」
「出久なら絶・秘伝忍法も会得出来ると」
「なら我のことは師匠と呼べ出久よ…いや…我が弟子」
「わたしは凛でいい」
「分かりました!大道寺師匠!凛さん!」

「お前たち少しこっちに来い」ボソッ
　そう言われたのは半蔵学院以外の生徒たちだった
「どうなされましたか？」
「出久の過去のことを話そう」
　霧夜の口から語られる出久の過去に皆は絶句した
「そ…そんなことが…」
「わ…私よりも酷い仕打ちを出久は……」
「ならわたしはだめね」
「な！何故だ！春花！」
「だって私のは薬品を使う…出久が薬品にトラウマを持っていても不思議ではないもの…」
「そんなことないよ春花お姉様！」
「い！出久！どうして『そんなことない』って言い切れるの！私はあなたにまた悲しんで貰いたくない！教えてどうして言い切れるの！」
「簡単だよ」
「え？」
「だってあれをしたのは春花お姉様じゃあないから」

「春花お姉様は僕のお姉ちゃんの1人…僕の家族の1人だもん」
「かっ家族？」
「うん！」
「僕の…たった1つしか無い僕の家族！」
「ありがとね出久」
「私も教えるわ」
「秘伝忍法を」
　この日からお姉ちゃんたちからの修行を始めていった
「それじゃあ最初はわたし達半蔵組だね」
「はい！わたしの巻物！」
　すると
「あれ？……！やばっ！」
「だっ大丈夫！出久くん！」
「だっ大丈夫だよ！少し……」
「少し？」
「少しびっくりしただけだよ」
「どうして？」

「驚かないで聞いてね」
「お姉ちゃんたちもちょっと来て」
「？どうしたんだ？」
「…き……」
「え？なんて？」
「出来ちゃった」
「何が？」
「絶！秘伝忍法」
全員が驚いた！特に飛鳥、焔、雪泉、雅緋が！それもそのはず絶・秘伝忍法は血の滲む修行をしてやっと出来る物だそれを1回巻物を見ただけで会得したのだ
「もう1回してくれないか出久」
「うん！分かった！」
モード・飛鳥　絶スタイル！
なんと出久の体の周りに緑色のオーラが現れ頬には炎を模した絵が出てきた
「うっうそー」
「じゃあ無く！すごいよ出久くん！」

「なぁ出久」
「一体どうやって会得したのだ？」
「最初はね巻物の力にのみ込まれそうだったんだけどね巻物が聞いてきたんだ『汝、我が力を何故欲する』って」
「え！わたしの時はなかったよ！」
「飛鳥多分だがあの時わたしとの訓練の時は『勝ちたい』と思っていたからではないか？」
「確かに」
「だからね僕はこう言ったんだ『皆を守れる力が欲しいんだ！だから僕に力を貸して下さい』ってそうしたら巻物が僕に力をくれたんだ」
「そんなことが」
「焔さん雅緋さんわたし達のも」
「そうだな」
「ああ」
　雪泉と焔、雅緋がそれぞれの巻物を渡した
「頑張ってみるよ！」
「あれ？」

「今回はすんなりと？」
「飛鳥の巻物で認められたから私達の巻物は出久さんを受け入れたのでしょう」
「よしっ！アタイたちの巻物も取り込んでさっさと修行しよーぜ！」
「今回ばかりは葛城さんに賛成ですね」
と言うとすぐに他の巻物も受け入れたら即修行をしたのだった
それから2年後出久は幼馴染みに再会する！

Ｋとの再会／Ｏとの出会い

やあ僕は緑谷出久ですあれから色々な修行をしました
お姉ちゃんたちは色々な武器を使って修行をつけてくれたんだ！まぁ両備お姉ちゃんは驚いたよ…忍転身するとおっお胸が大きくなったからね
今日は近くの商店街に来てるよ！
？何故かって？それはね
「出久くーん！買い物お願いね！」
飛鳥お姉ちゃんにおつかいを頼まれたからだ
「ならば出久手首と足首におもりをつけていけ」
と焔お姉ちゃんに言われたので今手首に１０キロ足首に２０キロをしている２年まえの僕なら無理だけど今だったら軽いくらいだ
「今日の修行もきつかったなー」
「あれ？あんなところに人だかりが？」
「ちょっと行ってみようっと」
ん？何だあの敵（ヴィラン）は

「どうしたんですか？」
「ああ」
「あの敵が子供の人質をとっているんだ」
「それでヒーローは動けないんだ」
　そうなのか
「わたし２車線以上無いと無理ー」
「火は我が苦手とするところ今回は譲ってやろう」
「そりゃどーも！今はこっちで手いっぱいだ」
「やつに有利な個性のヒーローが来るまであの子には耐えてもらおう」
　は？一体何を言っているんだ！
「なんでヒーローは何もしていないんだ！人質がいるっていうのに！」
　僕は捕まっている子の個性を見た
「！」
「あの個性は！」
　僕は知っているあの個性の持ち主を
　かっちゃん！
　その時かっちゃんと目が合った！気付くと僕のからだは走っていた

クソっ！クソっ！最悪だ！
俺は爆豪勝己だ！個性は『爆破』だ！
俺は今日も個性の練習をしていた！何故かって？来年は受験生だ！俺はもちろん雄英に入ろうとしている何故雄英なのかは昔幼馴染みと約束したからな！でもあいつは…俺に個性を教えたその夜にはいなくなっていた
おばさんに会おうと家のチャイムを鳴らしたが返事が無かった変だと思った俺は合鍵を使い部屋の中に入った！
そこにあったのはおばさんの死体だった。必死にあいつを探したがどこにもいなかったな俺は思ったあいつは殺されたんだと俺は決意したあいつの分まで頑張ってヒーローになることをだが今！
（クソッ！クソッ！誰か助けてくれないのか！）
あいつもこんな気持ちだったのか？なぁ
「あ！あいつは！」
俺は一瞬目を疑った死んだと思っていたあいつがいたからだ！
「かっちゃん！」
「出久！」
「なんでお前がここに！」

「そんなの！」
「きみが！助けを！求めてる！顔してたから！」
「おいガキ！」
「何なんだ！お前は！」
「この子の幼馴染みだ！」
「こいつの幼馴染みだ～」
「こいつは俺様の道具だ」
　ビキッ
「こいつは俺様に利用された～
　ビギビキッ
　哀れなバカガキだ！」
　ブチッ
　鈍い音が聞こえた気がした
「おいお前」ゴゴゴ
「あん？」
「今かっちゃんをなんて言った」ゴゴゴ
「だから」

「俺様に利用された哀れなガk」グハッ
　ヘドロが言い終わる前に出久の放った氷がヘドロだけを呑み込んだ！
「かっちゃんを！お前のようなモブが！侮辱するな！」
「かっちゃんは！かっちゃんは！」
「人一倍努力しているんだ！」
「そんなかっちゃんを侮辱するやつは僕が許さない！」
「ふぅ後はお願いします」
「ちょっと待ってくれ！」
「なんですか？」
「きみ何勝手に突っ走っているんだここは私達に任せt
「あなた達は何ですか？」
　そんなの私達はプロヒーローだが？」
「へ～子供が苦しそうになったいるのを有利な個性が居ないからって見捨てるのがプロヒーロー何だ～」
「ふざけるんじゃねぇ！」
「！」
「何がプロヒーローだ！僕でも出来ることができないような奴が名乗るな！1回辞書で

『人助け』という言葉を調べたらどうですか？」
　出久はヒーロー達を一蹴した
「かっちゃん大丈夫？」
「あぁありがとな出久」
「ううん別にただ『当たり前』の事をしたまでだよ」
　出久はかっちゃんを心配していた
「出久後で話があるんだが」
「かっちゃん僕も話したいことがたくさんあるんだ！」
　その光景を見ていた人がいた
「彼になら」
　帰り道の途中
「そうだったんか」
「すまんな力になれなくて」
「ううん別にいいよ」
「かっちゃんも雄英を目指すんだね！」
「『も』ということは！」
「僕も雄英いくよ！」

「そっか！出久もか！」
「なぁ出久？覚えているか？あの約束」
「もっちろん！僕はこの言葉のおかげで苦しい６年を耐えれたんだから！」
「そっか」
「よしっ！行くぞ！」
「うん！」
「「僕／俺達は二人で一人のヒーロー！」」
「「だね！／だな！」」
「楽しそうに帰っているとこ悪いんだが」
!?
「オ！オールマイト！」
「どどどどうしたのでででですか！」
「かっちゃんかっちゃん！オールマイトだよ！」
「うるせぇ出久！」
「ご…ごめん」
「で…でも！オールマイトだよ！」
「ＨＡＨＡＨＡありがとう！少年ゴハッ」ボフン

「オールマイトが萎んだ！」
「少年達ここからは内密にしてくれないか？」
　パサッ
　オールマイトが服をめくった時痛々しい傷があった
「４年前…敵から負った傷だ」
「ひっ！」
「呼吸器官半壊、胃袋全摘」
「度重なる手術と後遺症で憔悴してしまってね」
「私のヒーローとしての活動限界は今や」
「１日約３時間程なのさ」
　？
「あのーオールマイト？」
「なんだい？少年」
「僕治せますよ」
「本当かい？」
「はい！」
「鳳凰お願いね！」

コクコク
鳳凰はオールマイトの傷をすべて治した
「ありがとう少年」
「いえいえ」
「これでヒーロー活動が続けられますね！」
「あぁ！だが少年！」
「わたしが来たのはだね」
「謝罪と提案をしにきたのだ」
「まずはすまなかった」
「何がですか？」
「実はあの敵はわたしが捕まえたのだが」
「活動限界時間が来てしまってね」
「逃してしまったのだ」
「そちらの少年には大変苦しい事をさせてしまった」
「本当にすまなかった」
「いやいいんすよオールマイト」
「これがなかったら」

「出久に会えていなかったからな」
「ある意味よかったと思っている」
「ありがとう少年」
「そう言ってくれると助かる」
「さてそちらの少年！」
「はっはい！」
「ここからは提案だ」
「少年！」
「わたしの個性を受け継ぐ気はないかい？」
「へ？」
「わたしの個性は」
「『個性を譲渡する個性！』だ！」
「わたしの個性は聖火のごとく受け継がれてきた」
「その名も
『ワン・フォー・オール』」
「きみになら！あの場でたった1人！ヒーローだったきみになら！わたしの個性を受け継ぐに値する！」

「かっちゃん…」
「どうした出久？」
「僕が受け取ったらオールマイトから個性を奪うことになっちゃう…」
「そんなことを考えていたのか？」
「そっ！そんなことって…」
「オールマイトも言ってただろう」
「出久になら渡すことが出来るって」
「それにな」
「俺は出久ならいいと断言できる」
「どうして？」
「あの場でたった1人ヒーローだったからな！」
「知らない奴にオールマイトの個性を与えたくないのもあるし、一緒にヒーローになるんだろ？だったら使い道を間違えなければいいだけじゃねぇか」
「では少年！」
「受け継ぐ気はあるかい？」
「オールマイト…」
「はい！お願いします！」

「分かった」
「からだの方は出来ているみたいだからいけるな！」
「食え！」
「へ」
　あまりのことにかっちゃんと被ってしまった
「わたしのＤＮＡを取り込めばいいからな！」
「普通光の玉が出てきて…とか」
「そんなファンタジーなわけないじゃないか！」
「ほら食べたまえ！」
「よ…よし…」ゴクン
「ふぅ」
「どうだ？出久」
「えっとねお腹ぐらいのところから力がみなぎる感じかな？」
「よしきちんと受け継げたみたいだね！」
「オールマイト僕はこの力を使ってヒーローになります！」
「絶望を希望に変えるヒーローに！」
「それは良い目標だね！」

「おじさん関心するよ」
「オールマイトはおじさんではないですよ！」
「あっでもどうしよう」
「お父さんにどう言おうか」
「少年！このことは秘密にと！」
「あっ！えっと…オールマイト…」
「なんだい」
「僕のお父さんは忍者なんです」
　この近くにいる忍者は私が知る限りあいつ何だが…まさかね
「出久！」
「あっ！お父さん！」
　あれこの声は聞いたことがあるぞ？
「！俊典！」
「やっぱり！霧夜くん！」
「お父さん！オールマイトと知り合いだったの！」
「「大親友だ！」」
「出久」ボソッ

「どうしたのかっちゃん」ボソッ
「あの人が出久を助けたって人か？」ボソッ
「うん！」
「初めまして出久のお父さん」
「俺は出久の相棒の爆豪勝己です」
「出久を助けて下さりありがとうございました」
「あぁきみが出久の言ってた子か」
「出久が？」
「あぁ」
「私との修行の時何度も諦めかけていた出久が
『かっちゃんと一緒にヒーローになるんだ！』
　と言って喰らいついてきたからな」
「お父さん！」
「すまんすまん出久」
「だが俊典」
「何故ここに？」
「個性を渡したのさ！」

「そうか…」
「お前が決めたことだ」
「とやかくは言わない」
「出久いま一度聞く」
「その力をなんのために使う」
「人々の笑顔を守るため！絶望を希望に変えるために使う！」
「よく言った！」
「ならば使いこなすために修行だな」
「俊典は感覚的だからなあてにならん」
「ひどくない！霧夜くん!?」
「本当の事だろ？」
「爆豪勝己くんだったね」
「いつでも出久に会いに来てくれても構わないし難なら修行に参加しても良いきみの意思だがどうする？」
「そんなの決まってる」
「俺は出久と一緒にヒーローになるんだ！もちろん参加させてもらう」
かっちゃん…

「分かっただが生半可な修行ではないぞ」
「もちろんだ！出久と一緒にヒーローになるためだったらどんな修行だって耐えてやるぜ！」
　ありがとう…
「あぁそうだ出久！」
「何？かっちゃん？」
「今日おまえん家泊まるからな」
「え！良いけど…光紀さんには言ったの？」
「あぁ！泊まるって言っといたからな！」
「それじゃあひさびさに一緒に寝よ！」
「おう！」
　そして僕達は家へとかえっていったその夜
「かっちゃんお休み」
「出久もな」
　僕達はすぐに寝てしまった
　次の日
「かっちゃんおはよう！」

「あぁおはよう！」
「かっちゃん海浜公園に行こ」
「理由は…」
「おいお前はいいかも知れねぇが俺学校」
「ごめんかっちゃん」
「でも」
「あそこはゴミ溜めみたいになっているからね」
「個性の訓練でもあるしヒーローとしてやりたいんだ」
「だめかな？」
「だめもクソもねぇ」
「出久がするんだったら俺もする」
「一緒に強くなるんだからな」
　だが少年達は知らなかった
　そこで新しい出会いをすることを

少・年・変・身

やぁ僕は緑谷出久です
海浜公園に来て掃除をしています
色々なゴミがあるから良い訓練になっているよ
ワン・フォー・オールはまだまだ使いこなせていないんだ…後1年と半年の間で使いこなしたいな～
「ふぅ…疲れたー」
バキッドカッ
「？」
「あっちの方騒がしくない？」チラッ
「あそこに女の子が！周りの奴らは異形型か？」
そんなことはどうでもいい！
「早く助けなきゃ！」
「出久俺も来たぜ！」
「かっちゃん！」

「行くよ！」
「あぁ！」
　しまった…
　私はいつもの妖魔だと勘違いしていた
　いつもの妖魔なら簡単なのだがこいつらは何かが違う
　こんな時奈楽がいたら…
「なっ！しまった！」ザシュッ
　クソッ戻ってしまった！やばい殺される
「もう大丈夫！」
「「僕／俺達が来た！」」
「かっちゃん！」
「多分最初から全力で行かないと負ける…」
「そうみたいだな」
「なら」
「前置きはいらねぇ！」
「最初っからクライマックスだ！」
「行くぜ！行くぜ！行くぜ！」ＢＯＭＢ!!!

「そうだね！かっちゃん！」
　出久達は力を合わせて怪物達と戦った
「はっ！」
「おりゃ」ＢＯＭＢ！
「出久！合わせろ！」
「分かった！」
モード・焔！
「「紅蓮乱爆破！」」
　出久と勝己の合体技ー紅蓮乱爆破が決まった
　紅蓮乱爆破とは出久と勝己が背中を合わせて飛び切り込み回転をしながら斬撃と爆破を同時に放つ技である
「ぶっつけ本番でも出来たね」
「当然だ」
　だが
　ボコッ
　バキッ
　鈍い音が聞こえた

「「なっ…」」
　振り返ると怪物達は無傷で立っていた
「つ…強い」
　怪物達は女の子の方に行こうとしている
「でも！」
「助けれる命があるなら！」
「助けて欲しいと願っているのなら！」
「俺は！」
「僕は！」
「「絶対に諦めない！」」
　その時空から不思議な声が聞こえた
「いいねこの子達」
「実に興味深い」
「おう！」
「こいつらなら正しく使えるな」
「仮面ライダーの力を」
　そう聞こえると出久と勝己は白い空間に居た

「ここはどこなんだ」
「俺たちはさっきまであいつに…」
「やぁ君たち」
「誰だっ！」
「そう警戒しないで」
「そうだな…」
「僕達は力を与える者かな」
「力を与える者？」
「うんそうだよ」
「君たちは」
「あの怪物を倒したいのか」
「女の子を助けたいのか」
「どっちだい？」
　そんなの決まってる！
「「助けて倒す!!」」
「気に入ったぜお前ら！」
「俺はコイツラなら渡せるぜ」

「同感だ」
「自己紹介がまだだったね」
「俺は操真晴人」
「絶望を希望に変える仮面ライダー…」
「仮面ライダーウィザードだ」
「俺は万丈龍我」
「ダチを助けたいと決意して変身できるようになった仮面ライダー…」
「仮面ライダークローズだ」
「僕はフィリップだ」
「俺」
「仮面ライダーウィザードの力は緑谷出久に」
「だったら俺」
「仮面ライダークローズの力は爆豪勝己に」
　そう言うと出久の腰には手を模したベルトーウィザードドライバーと数多くの指輪ーウィザードリングが…勝己の腰にはレバーのついたベルトービルドドライバー手にはドラゴンを模した機械ークローズドラゴンと2つのボトル、ドラゴンフルボトルとドラゴンマグマフルボトル…更に拳の形をしたクローズマグマナックルがあった

「それじゃあ僕フィリップからはこの３つだ」
　フィリップはダブルドライバーに２つのガイアメモリを渡した
「さぁ行ってこい」
「負けるんじゃねえぞ！」
「君たちの初陣見さしてもらうよ」
「「はい！／おう！」」
　目を開けると公園に居た
「出久！」
「力を合わせて行くぞ！」
「うん！」
　出久達はそれぞれの変身モーションをとった
　出久のベルト音「シャバドゥビタッチヘンシン！シャバドゥビタッチヘンシン！♪」
　勝己のベルト音「ウェイクアップ！クローズドラゴン！
　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ！♪」
「今度は助けれるんだ！」
「行くぜ出久」
「もちろん」

「「変身！」」
出久のベルト音「フレイム！プリーズ！ヒーヒーヒーヒーヒー！」
勝己のベルト音「Ｗａｋｅ　ｕｐ　ｂｕｒｎｉｎｇ！　Ｇｅｔ　ＣＲＯＳＳ－Ｚ　ＤＲＡＧＯＮ！Ｙｅａｈ！」
出久は赤いリングーフレイムリングを手にはめてウィザードドライバーにかざした
勝己はクローズドラゴンにドラゴンフルボトルを装填しクローズドラゴンを変形させてビルドドライバーにさし、レバーを回した
「かっちゃんいくよ！」
「おう！」
「さぁショータイムだ！」
「今の俺は……負ける気がしねぇ！」
仮面ライダーに変身した２人は次々に怪物ー『スマッシュ』をなぎ倒していった
「それっ！」パンパン！
出久はウィザードガンで相手を的確に当てていった
「どりゃ！」バキッ！
勝己はクローズマグマナックルで殴って行った
「出久決めるぞ！」

「うん！」
　出久のベルト音「チョーイイネ！キックストライク！サイコ～！」
　勝己のベルト音「ｒｅａｄｙ！　ｇｏ！ドラゴニックフィニッシュ！」
「おりゃー!!!!」チュドーン!!!!
　出久と勝己の技が今度こそ敵を倒した
「なんとか勝ったね」
「あぁだがこれは…」
「わかってるって」
「雄英の試験のときには使わない」
「でしょ！」
「僕ももちろんそのつもり！」
「でも雄英で今みたいなやつが来たら」
「迷わず使うよ」
「俺もだ」
「まずは受からねえとな！」
　わかってるって！と出久は返した
「あ！きみ大丈夫だった？」

出久は女の子の方に声をかけた
「お兄ちゃん達ありがとう」
「私わ…」
「神楽！大丈夫か！」
「奈楽！」
「ありがとうお兄ちゃん達」
「バイバイ」
出久達は安心して見送った
「そういや」
「フィリップって名乗っていた人のこれ」
「1つは俺の個性の爆破だが」
「もうひとつのはお前か？」
そうフィリップさんからもらったガイアメモリは1つは『ボム』もうひとつは『インフィニティ』とあった
「まぁ出久は確かに無限の可能性があるもんな！」
「そっそんなこと…」
「でも！」

「僕絶対に使いこなすよ」
「仮面ライダーの力を！」
「俺もだ！」
「じゃあ帰ったらさっそく修行だね！」
「もちろん！」
明日はオールマイトも来るから今日の事を話そうね！とかっちゃんに言った
明日が楽しみだ

ヒーロー・タイム

僕達は今海浜公園へと続く道の途中にいる
雄英の試験まで後半年だ！頑張らなくちゃ！
ガヤガヤ
「なぁ出久」
「あっちの方騒がしくないか？」
「まさか敵か！」
「かっちゃん！」
「みなまで言うな」
「わかってる」
「助けるんだろ？」
「もちろん！」
「いくよ！」
僕たちは騒ぎの中に入っていった
「あそこにいるのは…ウォーターホース？」

「それに…子供！」
　そこにいたヒーロー…ウォーターホースは子供を守りながら戦っていただが体は見るも耐え難い姿をしていた
「分かっているよな出久」
「助ける…でしょ！」
「行くぞ！」
「うん！」
「「変身！」」
　出久のベルト音「ウォーター！プリーズ！スィー、スィー、スィー、スィー！」
　勝己のベルト音「Ｗａｋｅ　ｕｐ　ｂｕｒｎｉｎｇ！ＣＲＯＳＳ－ＺＤＲＡＧＯＮ！Ｙｅａｈ！」
　出久はウォーターリングでウィザードウォータースタイルに変身した
「ウォーターホース！大丈夫ですか！」
「君たちは…」
「仮面ライダーウィザード」
「同じく仮面ライダークローズ」
「仮面…」

「ライダー…」
「早くその子を連れて逃げて！」
「分かった」
「ありがとう」
「そいつはマスキュラー個性は筋肉増強だ」
「教えて下さりありがとうございます」
「いくよクローズ！」
「おうウィザード！」
「何だお前たちは！」
「「通りすがりの仮面ライダーだ！」」
「覚えておけ！」
「返り討ちにしてやる！」
「さぁショータイムだ！」
「負ける気がしねぇ！」
「相手はパワー型か…なら！」
バインド！プリーズ！
出久はバインドのリングでマスキュラーを水の鎖で動けなくした

「今だクローズ！」
「おう！」
　勝己のベルト音「ｒｅａｄｙ！ｇｏ！ドラゴニックフィニッシュ！」
「おりゃー！」
「グァー！」チュドーン！
「俺たちが苦戦していた敵を一撃で…」
「ウォーターホースすみませんが後の処理を…」
　ドサッ
「ウォーターホース！」
　ウォーターホースはその場に倒れ込んだ
「こ…この傷！」
　マスキュラーとの戦いで受けた傷口から血が出ている
「ねぇ！仮面ライダー！」
「出来るのだったら！」
「お父さんたちの傷を治して！」
「お父さんたちは僕を庇って…」
　出久は子供の目を見て言った

「もちろんだよ」
「僕はもう絶望を見たくない…」
「僕は絶望を希望に変える仮面ライダーだ」
「フェニックス・ヒーリング」
「あ…あれ？俺たちの傷が…」
「なくなっている…」
「はい！僕の個性で…て！やっちゃった！個性を無許可でしてしまった！どうしようどうしよう　」
「俺たちを助けてくれたんだそれぐらいは多めにみるよ」
「ありがとうございますウォーターホース！」
「あぁよかった…」
「ねぇ仮面ライダー？」
「何かな？」
「お父さんとお母さんを助けてくれてありがとう！」
「ウォーターホースさっきから思っていたのですがこの子はもしかして…」
「はい息子の洸汰です」
「よし洸汰くん」

「僕の名前は緑谷出久」
「よろしくね」
「俺は爆豪勝己だ」
「よろしくな」
「緑谷お兄ちゃん爆豪お兄ちゃん」
「本当に助けてくれてありがとう」
「「どういたしまして！」」
「では僕達はここらで…」
「あぁありがとうございました後の処理は任せてください」
「お願いします」
「バイバイ洸汰くん！」
「じゃあな洸汰」
「うんバイバイ！」

「やっちゃったね」
「全くあそこでパニクってなかったらかっこよかったんだがな」
「痛いところつくなよ…」

「拝見させてもらったよ」
「緑谷少年！爆豪少年！」
「「オールマイト！」」
「君たちに特例としてヒーロー仮免許を渡そうとしたらね」
「戦っているんだもん」
「おじさんびっくりしているよ」
「ありがとうございますオールマイト」
「さてそれぐらいにして帰ろうか」
「はい！」

家に帰った翌日
「お姉ちゃんたち遅いな…」
「あぁリーダーの４人か…」
「僕探してくる！」
「俺も行きてぇがあいにく学校だ…」
「かっちゃんは行ってきてよ」
「僕は僕で探すから」

「すまねぇな」
「じゃあ行ってくる！」
「おう」
　出久は飛鳥、焔、雪泉、雅緋を探しに出た
～～～～～2時間後～～～～～
「後探していないのはここぐらいか…」
　！
「飛鳥お姉ちゃん！」
「みんなも！」
「やっと来たか」
「誰だお前！」
「俺を忘れたのか？」
「な…お前は…」
「紹介が遅れたね」
「俺は道満」
「忍の世界に復讐するものだ」
「お前が何故お姉ちゃんたちを…」

「お前が倒れていると言ったらのこのこ来てくれたよ」
「全く馬鹿な小娘共だなぁ」
　は？
「お前のようなモルモットを…」
　僕のことなんてどうでもいい
「好きになるなんてなぁ」
　お姉ちゃんたちが僕の事を…
「俺はこの小娘共を使って今度こそ復讐する！」
「出久くん…逃げて…」
「出久私達はなんとかなる」
「出久さんお逃げください」
「出久！お前の敵う相手では無い！」
「五月蝿いぞ小娘共」
　そう言うと道満は飛鳥たちを殴った
「「「カハッ」」」
「……わ…な」ゴゴゴ
「あぁ？何だ」

「お前のようなやつが！」
「僕の大切な人達に！」
「僕の家族に！」
「さわるな！」
「お前のようなモルモットが何ができる」
「お前を倒して家族と帰るッ！」
　その時またあの白い空間にいた
「出久」
「助けたいか」
「当たり前だ」
「僕の…僕のたった1つの家族何だ！」
「その気持ち受け取ったぜ」
「このリングはお前の守りたいという気持ちが強ければ強いほど力を増していく」
「お前の守りたいというものは何だ」
　僕の守りたいもの…
「それは…家族の笑顔！」
「よく言った」

「これを渡す」
「お前の守りたいものを守れよ」
「はい」

「行くぞ！道満！」
　出久のベルト音「シャバドゥビタッチヘンシン！シャバドゥビタッチヘンシン！」
「守りたいものを守るため！」
「変身！」
　出久のベルト音「アルティメットインフィニティ！プリーズ！アルティメット・インフィニティ！サイコー！」
　出久はアルティメットインフィニティリングにより仮面ライダーウィザードアルティメットインフィニティスタイルへと変身したこのフォームの力は守りたいという気持ちに応じて力を増していく
「さぁショータイムだ！」
「ふん！たかが姿が変わっただけのこ「遅い！」何！」
「僕は守る！」ドゴッ！
「僕の家族を！」バキッ！

「仲間も友達も！」ドカッ！
「だからお前を倒して家族と帰るッ！」
「どりゃー！」
「グハッ！」
「これで…決める！」
　出久のベルト音「チョーイイネ！アルティメットストライク！」
「僕の飛鳥たちにこれ以上！」
「近寄るな！」ドカーン!!!
　出久の放った必殺技が道満を直撃し道満を倒した
「飛鳥たちに近づいてみろ」
「僕は今度こそあなたを潰す！」
「お姉ちゃん！大丈夫？」
「なんとかな」
「まさか倒してしまうなんて」
「出久くんさっきわたしのこと…」
「あぁお姉ちゃんとは言っていなかったな」
「そ…それは」？（？　？・？―？・？　？）？

「無我夢中だったというかなんというか…」？（？　？・？―？・？　？）？
「そ！それを言うなら」
「僕のことがその…好きっていうのは…」
「弟として？それとも…」
「わたしは出久を異性として好きだぞ」
「え！」
「出久」
「ここにいる４人は」
「出久の事を異性として好きだ」
「出久はどうなんだ私達の事を…」
「もちろん大好き」
「でも…」
「出久さん」
「新しい法律覚えていないでしょ」
「出久さんの事だから最終的に誰かを選ばなくちゃいけないなんて考えていたのでしょう」
「新しい法律？」

「一夫多妻制です」
「これができたのですよ」
「だから…」
「全員と付き合うことができるんだぞ」
「僕なんかでいいの？」
「敵に個性を植え付けられた僕を…」
「なんかじゃないよ」
「私達は出久くんが好きなの」
「ありがとう飛鳥お姉ちゃん」
「うん…よし！」
「みんな僕と付き合ってください！」
「「「もちろん！」」」
「なら私達も呼び捨てにしてください」
「うん…分かった」
「飛鳥」
「うん！」
「焔」

「おう！」
「雪泉」
「はい！」
「雅緋」
「あぁ！」
「これからもよろしくね」
「こちらこそ」
「よろしくな」
「はい」
「頼むぞ出久」
「やっとか出久」
「え！かっちゃん！それにみんなまで!?」
「いつからそこに！」
「お前が」
「僕の飛鳥たちにっていうところからだな」
「俺は応援するぜ出久」
「相棒だからな」

「私達もです」
「応援してるぜ」
「かっちゃん…みんな…」
「ありがとう…」
「帰ろうかみんな」
お――！

雄英受験

「ここが雄英か～」
「大きいな～」
今僕とかっちゃんは雄英の目の前にいる
「頑張らなくちゃね」
「頑張るもクソもないだろ」
「俺達は雄英に受かるぞ」
「もちろん」
「行くぞ！」
雄英の門を入った時前で転けそうな女の子を見つけた
「！危ない！」
ガシッ
「転んじゃったら縁起悪いもんね」ニコッ
「あああありがとう…ございます…」？（？　？・？―？・？　？）？
「そ…それじゃあ！」

女の子は顔を真っ赤にして掛けていった
「顔を真っ赤にしていたけど気分が悪かったのかな？」
勝己はため息をはいてこう言った
「こんの…」
「無自覚天然タラシが!!!」
「何でそんなに怒るのさ！」
「お前が」
「バカでアホで鈍感で無自覚で天然なところに怒ってんだよ！」
「ハァ…」
勝己は思っていたあいつ惚れたなと
「そんなことより行くぞ」
「待ってよかっちゃん！」

受験の内容を言うのはプレゼントマイクだ！
いつもラジオ聴いてます！リクエストも出しています！
やばい叫びたい…めっちゃＹｅａｈって言いたい！そういえばかっちゃんの変身した時の音最後Ｙｅａｈだなぁ

「こいつはシヴィー!!」
「受験生のリスナー!」
「それじゃこれから実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!」
「アーユーレディ!?」
あ…今のアーユーレディーでかっちゃんのクローズドラゴンが反応しかけた
それから実技試験の説明が行われた。簡単に言うと
各受験生はそれぞれ指定された『模擬市街地演習場』で15分間で3種類のの仮想ヴィランを倒していく
別に倒さなくても行動不能にさえすれば加点になるから無理に倒さなくても良い
当たり前だけど他の受験生への攻撃などのアンチヒーロー行為は厳禁
なるほど別々にするのは同じ学校どうしで協力させないため
15分というのは素早く事態を解決するため
良く考えられている」
「声出てる」
「嘘…直ったと思ったのに…」
「質問よろしいでしょうか!?」
「プリントには四種類の仮想ヴィランがいると書いております!」

「誤載であれば日本最高峰である雄英において恥ずべき痴態です！」
「我々受験生は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです！」
「あとそこのもじゃもじゃ頭の君！」
　いきなり自分の事を言われた
「さっきからぶつぶつと」
「物見遊山なら帰りたまえ！」
「す…すいません」
　かっちゃんが隣で必死に笑いを堪えていた
「オーケーオーケー、受験番号７１１１番君ナイスなお便りサンキューな！」
「四種目の仮想ヴィランは０Ｐ！」
「そいつは言わばお邪魔虫だ！スーパーマリオやったことあるか？」
「アレに出てくるドッスンみたいな奴だ。各会場に一体、所狭しと大暴れしいるギミックよ！」
　普通試験の時にスーパーマリオでるか？
「そういうことでしたか！」
「ありがとうございます！」
　だが何故そんなものを？と考えていた

「俺からは以上だ!!」
「最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう」「かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言った！『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えてゆく者』と!!」
「さらに向こうへ、《Ｐｕｌｓ　Ｕｌｔｒａ》!!」
「それではみんな良い受難を!!」
「それじゃあ俺はこっちだ」
「うん」
「試験終わったらここで」
「おう」
　僕は今自分の試験会場にいる
　さっきの真面目な子も転けそうになっていた女の子もいた
「ハイスタート！」
　その言葉と同時に僕は走った
「ぶっ殺す」ドカッ
　案外脆い僕はワン・フォー・オールフルカウル３０％で仮想敵を殴っている
「あの～合図されたよね？」
　そう言うとわれ先にと他の人たちも走った

「ふぅ…このぐらいでいいかな」
計算が間違っていなければポイントは６０のはず
「大丈夫？」
「すぐに安全な場所に運ぶね」
で今は怪我をしている人たちを救助している
ヒーローとして当たり前だ
ゴゥーン!!!
「０ポイント敵だ！逃げろ！逃げろ！」
終盤で０ポイント敵がでてきた
みんなどうして逃げるの？
ヒーローを目指しているんだよね？
「う…」
！
門のところにいた女の子！
瓦礫に挟まっているのか！
「今助けるよ！」

フルカウル３０％×蛙×兎×龍！
蛙と兎は脚力強化、龍は拳に！
「必殺！」
「ドラゴニック・デトロイト・スマッシュ!!」
バゴーン!!!!
「しゅーーーーりょーーーーう!!」
「ふぅ…」
「大丈夫？」
「足…くじいたみたい…」
「少し待ってね」
フェニックス・ヒーリング
「どう？」
「あれ？痛くない？」
「よかった！それじゃあ」
「ありがとう！」
「どういたしまして」

「あ！かっちゃん！」
「おう出久！」
「お前も倒したんだろ」
「うん！」
「大方人助けのため」
「流石かっちゃん！」
　あぁそうだ…とかっちゃんが言ってきた
「今日泊まるから」
「分かった！」
　その日の夜
「飛鳥さん焔さん雪泉さん雅緋さん…」
「ちょっと話が…」
「何？爆豪くん」
「出久の彼女」
「増える可能性大です」
「試験日に1人惚れさせていましたから」

「流石だな！私達の出久は！」
「もう少し自重して欲しいですけど…」
「まぁいいじゃないか」
「それもそうですね」
　かっちゃんは何を話していたんだろ？
「かっちゃん！受かるといいね！」
「受かるに決まってんだろ」
「バカ出久が」
「かっちゃん酷い！」

　雄英から通知が届く日

「出久～」
「手紙が来たよ～」
「ありがとう未来お姉ちゃん！」
　僕は袋を開けた
「随分小さい機械ね」

「いや…春花お姉様の機械が大きすぎるのでは」
　と言いながらも起動させてみた
「わたしが投影された！」
　オールマイト！なんでここに！
「今わたしが何故ここにいるのかって思っているね」
　え！なにエスパーですか！
「今年から雄英の講師となるので」
「連絡が出来なかったのだよ」
　そういうことだったのか
「え！巻きで？…分かったよ」
「筆記試験はすべて満点」
「流石だね」
「さて実技試験は…」
「敵ポイント６０ポイント！」
「これだけでも十分合格圏内だね」
「しかし、我々が見ていたのはなにも戦闘能力だけでは無い！」
「我々が見ていたもう一つの基礎力、レスキューポイント！」

「しかもコイツは完全審査制だ!!人助け、正しいことした人間を排斥しちまうヒーロー科などあってたまるかって話だよ!」
「綺麗事?上等さ!ヒーローってのは命懸けで綺麗事を実戦するお仕事だ!」
「緑谷出久レスキューポイント７０ポイント!」
「合計１３０ポイント!」
「主席合格だ!」
　本当に…僕が…
「来いよ!」
「緑谷少年!」
「ここが君のヒーローアカデミアだ!!」
「はい!」
「やったね出久!」
「うん!」
「かっちゃんに連絡しないと」
　プルルルプルルル
「あ!かっちゃん!」
「おう出久」

「合格したんだろ」
「それも主席で」
「うん！でもどうして主席だってわかったの？」
「俺が次席だからだ」
　やっぱりすごいやかっちゃん
「一緒に雄英に行くぞ！」
「うん！かっちゃん！」
　ガチャ
「出久～」
「合格したんだって～」
「聞いたよ～」
「飛鳥！」
「うん！合格したよ」
「だったらご褒美のハグだよ～」
　ギュッ
「えへへ」
「どう出久？」

「…る…」
「ん？」
「苦しい…」ガクッ
「飛鳥！あんたのでかいんだから」
「加減しなさい！」
「う…ごめん未来ちゃん」
「それでしたら私が…」
「詠お姉ちゃんもだめ！」
「は…はは」
僕のヒーローアカデミアは前途多難です

個性把握テストが来た～!!

今日は雄英の入学式だ！
めっちゃ緊張してきた…どうしｙ
「おーい出久～」
「行くぞ～」
あ！かっちゃんが来た
「うんわかった～」
「みんな行ってくるね」
『行ってらっしゃい！』
「行ってきます！」
「かっちゃんお待たせ行こうか」
「おう」
～～～～～～～～～～
「さて行ったわね」
「私達も準備しましょうか」

「そうね」

～～～～～～～～～～～～～～

「1のA…1のA…」

「あった！」

「扉デカっ！」

「バリアフリーだな…これ」

そうみたい…

ガラガラ

「初めまして」

「ぼ…俺は飯田天哉だ」

「よろしく！」

「よろしく」

「僕は緑谷出久」

「こっちは」

「爆豪勝己だ」

「そうか！それより緑谷君はあの実技試験のカラクリに気づいていたのかい？」

「俺は全然気づけなかった…」

なんのこと？
「飯田っったな」
「こいつはそんなこと」
「考えていねぇ」
「何！」
「じゃあどうして？」
「０ポイント敵の下に女の子がいたから」
「助けただけだよ？」
「そうか…」
「現時点でヒーローに近いのは」
「緑谷くんのようだな！」
「あ…ありがとう」
「あ！そのモサモサ頭は！」
「あ！そのｋ…」ドカッ
いきなりかっちゃんが殴ってきた
「かっちゃん！何すんだよ」
「お前の言おうとしていた」

「爆弾発言を止めてやったんだ」
「感謝しろ」
「爆弾発言なんて…」
「ただ可愛い顔の子って言おうとしただけなのに…」
「それを爆弾発言って言うんだよ！」
「ホラみろ」
「か…可愛い…」？（？　？・？―？・？　？）？
「わわわ…大丈夫!?」
「うん…私」
「麗日お茶子」
「よろしくね」
「僕は緑谷出久」
「俺は爆豪勝己」
「俺は飯田天哉だ」
　すると
「お前らお友達ごっこするんだったら他所に行け」
「ここはヒーロー科だぞ」

声がした方を向けば、寝袋で横になって栄養ゼリーを啜っている小汚い（僕とかっちゃんは知っている）人がいた。
この時僕とかっちゃん以外の心がたぶん一つになったと思う
この人怪しいと！
「はい、静かになるまで5秒かかりました」
「君たちは合理性に欠けるね」
「担任の相澤だよろしく」
「相澤さん…」
「また…寝袋とゼリーですか…」
「あぁ…合理的だからな」
「早速君たちにはこれに着替えてグランドに集合してもらう」
相澤先生が自分が入っていた寝袋から取り出したそれは雄英の体操着だった受け取るとなんか生暖かかった
「えっ、入学式は!?ガイダンスは!?」
「ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ」
「雄英は自由な校風が売り文句」
「それはまた教師側もまた然りだ」

僕達は更衣室で体操着に着替えた

「「「個性把握テストォ!?!?」」」

「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、５０メートル走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈」

「以上８種目をやってもらう」

「爆豪、お前から行け」

「因みに、中学の時は個性禁止だっただろ？」

「まぁ」

「ソフトボール投げいくつだ？」

「６７メートル」

「じゃあ個性使ってやってみろ」

「円から出なけりゃ何しても良い」

「思いきり投げろ」

「そんじゃ」

　かっちゃんは個性の爆破を使って投げた

「オラァァ!!」

７８０メートル
「まずは自分の最大限を知る」
「それがヒーローの素地を形成する合理的手段」
なるほど、個性を使い自分の個性を含めて限界を知るのか…確かに個性を使っての記録は今までやった事は無い
というか僕まずしたことないんですけど!
「なんだこれ!!すげー面白そうだ!」
「７８０メートル!?すげーな!」
「個性使えるとか最高じゃん!」
うわ～今絶対に地雷踏んだな
「流石ヒーロー科だな!」
その後に絶対になんか言う…
「面白そう…か」
「ヒーローになる為の３年間を、そんな腹づもりで過ごす気か?」
やっぱり…
「よし」
「トータルで最下位の成績の奴は見込み無しと判断して除籍にしようか」

「生徒の如何は先生の自由!!」
「ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ！」
　相澤さんらしい
「最下位除籍って……理不尽すぎる!!」
　みんなの叫びを相澤先生はどこ吹く風と話す。
「自然災害、大事故、身勝手なヴィラン」
「厄災はいつどこで起こるか分からない」
「日本は理不尽にまみれているんだよ」
「そういう理不尽を覆していくのがヒーローだ」
　そうですね
「…っ！」
「放課後にマックとかで談笑したいならお生憎様」
「これから3年間、雄英は全力で君たちに至難や苦難を与えていく」
「Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａだ」
「全力で乗り越えて来いよ」
「それと」
？

「時々来る」
「先生達だ」
　どっかで見たことあるな～
「みんなよろしくね！」
　お姉ちゃん達が現れた
「何でいるの!?」
　そこにいたのは飛鳥、斑鳩、葛城、雲雀、柳生だった
「あ～出久くんだ～」
　そう言うと雲雀お姉ちゃんは突撃してきた
「ゴフッ」
「雲雀さん！出久大丈夫か！」
　かっちゃんが近寄って来た
「かっちゃん…目の前に兎がいっぱいいるんだ」
「出久何見てんだお前…」
「てかどこ逝く気だ!?」
「出久くん死なないで～」
　ムギュ

「雲雀さん…」
「それは逆効果」
　それからなんとか生き返った
「え～」
「時々来る先生達の一部だ」
　相澤さんは簡単に済ませた
「でかいのがいっp」ドカッ
　紫色をした髪の男の子が言い終わる前に
「何かよく分からないけど殴らなきゃいけない気がした」
　出久によって制裁された
「じゃあ」
「さっさと行くぞ」
　それを相澤さんはスルーした
　一種目…立ち幅跳び
　ここは鳥で行こうか
「アニマルエンチャント鳥」
　出久は背中から翼を出した

「緑谷それいつまで続くんだ？」
　え～と
「…無限…ですかね」
「緑谷出久記録無限」
「無限って初めて見た…」
　二種目：５０メートル走
　ここは試験でもしたようにワン・フォー・オール×蛙×兎
「スタート」
　出久は文字通り一瞬で駆けた
「記録０．００１秒」
「くそっ得意種目で負けた」
　飯田くんに勝っていたみたいだ
　三種目：上体起こし
　ここはワン・フォー・オールでした
「２０５回」
「吹っ飛ばされそうになった」
「大丈夫？」

「あぁ」
四種目：反復横跳び
５０メートル走のときと同じように
「記録１９４回」
「負けた…」
さっき出久にボコされた子が言った
五種目：握力
指先にワン・フォー・オール４０％をしてやったら
バキッ
「あ…先生壊してしまいました…」
「お前これ…」
「１トンは耐えれる設計になってんだぞ…」
「すいません…」
「まぁいい…記録測定不能」
六種目：ソフトボール投げ
龍にしよう
出久がボールを投げた時

「うわっ！龍が出てボール持っていきやがった!?」
　僕の個性の龍です
「記録無限」
　次は麗日さんだ！
「麗日記録無限」
　麗日さんは個性のゼログラビティで無限を叩き出した
　七種目：長座体前屈
　ここは蛇と蛙で
「記録１８メートル」
　見た目が蛙っぽい子は２０メートルだったすごいな…
　八種目：持久走
　ワン・フォー・オールだけで行こうか
「出久！勝負だ！」
「分かったよかっちゃん！」
　僕らは最初から全力疾走をした
「同着」
「記録」

「１分３５秒」
途中女の子が乗り物を使っていたけど個性だから良いとのことだ
ようやく全種目がおわった
「諸君ご苦労様」
「いちいち説明するのは合理的じゃ無いからパパッと結果だけ発表するぞ」
空中に投影された順位では僕が一位だった最下位の人であろうさっきの紫色の子ががっくり項垂れている
「ちなみに除籍は嘘な」
「君たちの実力を最大限にまで引き出すための合理的虚偽だ」
それが嘘でしょ
「「「はあああああぁぁぁ!!!??」」」
「あんなの嘘に決まってますわ」
「ちょっと考えれば判ることです」
いやこういう時の相澤さんは本気だ
それでもなお除籍無しって事は……少なくともここにいる全員が見込み有りだと判断したんだと思う
「飛鳥ちゃん」

「出久くんが一位だよ～」
「そうだね！」
「出久くん一位おめでと～」
　出久は素直に喜んだ…が
「ゴブフッ」
　また雲雀の突撃にあってしまったのだ
「あれ？どうしたの？出久くん？」
「雲雀さんはひとまずどきましょうか」
「あれ？かっちゃん」
「今度はお花畑が見えるよ～」
「だからお前はどこ逝くきなんだよ！」
　ガクッ
「こうなったら…」
「飛鳥さんちょっと耳を」
「何？」
　ゴニョゴニョ
「それを言わなきゃいけないの？」

「恥ずかしいよ～」
「お願いします」
「分かったよ…」
「出久起きないと」
「…その…」
「チューするよ…」
　ガバッ
「起きたか」
「あれ…ここは？」
「寝てたんだよ」
「あはは…」
　そのあとはカリキュラムの書類や時間割を受け取っておわった
「緑谷君本当に凄かったぞ！５０ｍ走や持久走は自信があったんだが、やはり世間は広い！これからも一緒に頑張ろう!!」
　飯田君まじめだ、受験の時は怖そうな人かと思っていたけど、なんとか仲良くなれそうだ！
「お三人さーん、駅まで一緒に行こ！」

麗日さんが一緒についてきたので途中までご一緒することにした。
「君は麗日くん！」
「出久くんテストすごかったね！」
「麗日さんもすごかったよ！」
「そう言われると嬉しいな！」
「そうだ緑谷くん！」
「時々来られる先生達のこと何だが、えらく親しげだったが、どういうことだ？」
「うちも、それ思ってた！」
「あの人達は、出久の姉だ」
「む！緑谷くんの姉は、たくさんいるのか！」
「でも何故なのだ？」
「え～と…どう言おうか」
「話したくなければ、話さなくてもいいぞ」
「済まなかったな」
「いやいや、こちらこそごめんね」
「今は話したくない…かな」
「それじゃあ、帰ろっか！」

「そうだね、麗日さん！」

戦闘訓練

「出久～いってらっしゃ～い」
　飛鳥に見送られ出久は家を出た
　今日は、初めてのヒーロー基礎学だ！
　そう思うと時間がすぐに過ぎ去っていった
～～～～～～～～～～～～～～
「わーたーしーがー・・・・普通にドアから来た!!」
　そして担当するのはご存知、ナンバーワンヒーローのオールマイトだ！そして今日はスーツではなくヒーローコスチュームで登場した
　赤、青、黄色のトリコロールにあしらわれた白は正にヒーロー然としたオールマイトのオーラを引き立てていた
　気のせいか、風が無いのにマントが軽くひらりとはためいているように見える
「すげぇや、本当に先生やってるんだ・・・・！」
「画風違い過ぎて鳥肌が・・・・！」
「私の担当はヒーロー基礎学！ヒーローの素地を作る為に様々な訓練を行う科目だでぁ

り、当然、単位は最も多い。そして今日の訓練は、これ！」
　フレアマークがついたＢＡＴＴＬＥと書かれたプラカードを突き出す
「戦闘訓練！」
　ヒーローと言えば、ヴィラン退治であり、いきなり『個性』を存分に振るう事が出来る環境に放り込まれると知り、興奮しない筈が無い。
（ヒーローはそういうのじゃないのに…）
「そしてそれに伴ってこちら！」
　壁の一角が突き出て出席番号を振ったケースを入れた棚を露にする
「入学前に送ってもらった個性届と要望に沿ってあつらえたコスチューム！着替えたら順次グラウンドβに集まる様に！格好から入る事も大事だぜ、少年少女！自覚するんだ、今日から君達はヒーローだと！」
　僕のコスチュームは手に大きめの小手があり、足には特殊な金属で作られたアイアンソールを、腰には巻物を複数持てる用のホルダーと、リングを持てる用のホルダーが付いていた
　かっちゃんのは原作のコスチュームです
「あっ！出久くん！格好いいね地に足ついた感じで、私なんかパツパツスーツだったよ…ちゃんと要望書けば良かった」（ ̄Д ̄）ハァ…

うん…麗日さんも良いと思うけど、直視出来ない！
隣で峰田くんが「ヒーロー科最高！」て言っていたけど…
「出久さ～ん」
今回は紅蓮隊のメンバーだった
「あっ詠お姉ちゃん」
「て何でその格好なの!?」
今の紅蓮隊の格好は転身した時の格好であった
「焔さんがこうしたら臨場感が出ると仰ったので」
「でかいのが、また八つｍ」ブベラッ！
峰田が言い終わる前に、二つの拳が放たれた
「未来さんと出久は、何で殴ったんや?」
「つぃ…」
「おい峰田次それに類似している言葉を、発したら除籍にするぞ」
出久と未来が峰田を制裁したあと相澤が言った
「相澤先生いたんですか?」
「まぁな」
「よく似合ってるぞ皆、格好いいぜ！それでは始めようか有精卵共!!戦闘訓練の時間だ

!!」

オールマイトの号令で皆いったん話とかを止める。

「先生！ここは入試の時の演習場ですが、また市街地演習をするのでしょうか？」

全身鎧の人が質問した。声からして飯田君だな。格好いい！

「いいや、２歩先に踏み込む！これから行われるのは屋内での対人戦闘訓練だ!!」

確かにヴィラン退治は屋外でしているところがよく見かけるけど、屋内でやるとすると銀行やお店への強盗襲撃、人気の無いところでの裏取引、籠城に軟禁や監禁。ヒーローに見つからないようにするにはまさに屋内の方が最適と言ったところか。

「これから君たちはチームを組んでヒーロー側とヴィラン側に別れてもらう」

「基礎訓練も無しにですか？」

「その基礎を知るための実践さ！ただし今度はただぶっ壊せばＯＫのロボ相手ではないというのがミソさ」

「勝敗システムはどうなります？」

「ぶっ飛ばしても良いんスか？」

「相澤先生みたく除籍とかあるんでしょうか……？」

「別れるときはどのように別れれば良いのでしょうか？」

「このマントヤバくない？」

「んん～～～聖徳太子いいい!!!ちょっと落ち着いてね、今説明するから!」
　ポケットからカンペみたいな紙取り出して説明を開始した。まだ教えるの不慣れなんだ
「いいかい、状況設定はヴィラン側がアジトに核兵器を隠してヒーロー側がそれを処理しようとする状況だ!ヒーロー側は制限時間内にヴィランの捕まえるもしくは核兵器の回収をする。逆にヴィラン側は制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえる事」
(((((設定アメリカンだな!.)))))
「ちなみに組み分けと対戦相手はクジで決める」
「適当で良いのですか?」
「ほらプロヒーローは他事務所と急増でチームアップする事も多いし、そのためじゃ無いかな?.飯田くん?.」
「なるほど先を見据えて計らい。失礼しました!」
「さ、さすが緑谷少年。良いところに目をつけるね（ヤッベぇ実は本当に適当だった）」
（あの目は適当だったな、オールマイト）
　そう確信する勝己だった
「それじゃあ、クジを引いてくれたまえ」
《原作と同じチームです》

「それじゃあ、いくよ」
「Aチーム、ヒーロー！」
「Dチーム、敵！」
　僕と麗日さんがヒーローで、かっちゃんと飯田くんが、敵だ
「出久！負けねぇぞ！」
「僕達だって！」
「そうだね！出久くん！」

　訓練施設内
「出久は、まず索敵をしてくるから、バレていると思っていたほうが良い」
「む！そうなのか！」
「よし、こうしよう、俺が出久を抑えておくからお前は、核を持って走り回っとけ」
「分かった」
「後この部屋の荷物を片付けておけ、麗日の個性で武器にされる」
「うむ！そうしよう！」
　その頃出久達は…
「って、かっちゃんなら考えるから」

「すごいね！そこまで分かっちゃうなんて！」
「付き合いが長いからね」
「それならこっちにも、考えがある」
「私は何したらいいの？」
「麗日さんは、バレない様に飯田くんのところに行ってくれる？」
「うん！わかった！」
「もうすぐ始まるね」
　ピー！
「よし！行こう！」
「まずは、兎とコウモリ！」
　出久は個性を発動して動物を出した
「場所の把握よろしくね！」
「これが出久くんの個性？」
「うん、僕の個性の動物だよ」
「内容は、動物を出したり、動物の能力を使ったり出来るんだ！」
「ん…場所が分かったみたい、作戦通り行くよ！」
「お～！」

建物内
通路の角から…
Ｂｏｍｂ!!
「やっぱり来たね！」
「来るのは、分かってんだよ！」
「麗日さん行って!!」
「う…うん！分かった！」
タッタッタ
「行くよ！かっちゃん！」
「こっちもだ！出久！」
モニタールーム
「おー!!」
「すげーぜ！あいつら！」
モニタールームでは、出久と勝己の勝負で盛り上がっていた
「流石だな出久も爆豪も！」
「そうですね焔さん」ウキウキ！
焔が言ったのを詠は楽しそうに返した

「この勝負、勝ちは出久ね」
？
「どうして？春花様？」
未来がたずねると…
「かっちゃん終わりだよ！」
「何言って…」グラッ
勝己は突然倒れた
「（ゝ ー、）フゥー…　何とかバレずに出きたみたいだね」
「どういう…こと…だ？」
「部屋の隅にコウモリを出していたんだ」
「コウモリの超音波でかっちゃんの三半規管をいじったんだ」
「…完敗だな」
「お前のことだ、どうせ周りに被害が出ない選択をしたんだろ？」
「流石かっちゃん！」
「さて…麗日さんのところに、行かなくちゃ！」
「麗日さん。そっちはどう？」
「あっ！出久くん！」

「ごめん…飯田くんのキャラマネで、笑ってしもてバレてしまった」
「それで飯田くんが、核を持ったまま…」
「分かった！それじゃあ…」
「麗日さん、飯田くんの注意を引いてくれる？」
「うん！分かった！」
　さてと…
「やりますか」
《アニマル・エンチャント》
『カメレオン』
「麗日さんのところに、行かなくちゃ」
　核の部屋
「ハッハッハ！ヒーローよ、ついてこれるかな！」
　飯田くんは役になりきっていた
「飯田くん！きみは、ヒーローになろうとしていた！」
「なのに…なんでなの？」
　麗日さんは飯田くんを、説得しているみたいだね
　僕は、気付かれないように移動した

「はい、確保」
「えっ！」
「緑谷くん!?」
「出久くん、一体何処から!?」
「カメレオンのちからでね。」
　出久は、カメレオンのちからで飯田の後ろを取り、核を奪取した。
　その後の評価はそこそこに。
（作者が書くのがめんどくさいからです。すいません）
　放課後
「出久～帰ろーぜー！」
「うん！」
　とあるバー
「へぇ……オールマイトが教師ねぇ」
「目の前で生徒が殺されたらどうなるんだろうなぁ」
　体のいたるところに、手を付けているやつが言った。
「では、死柄木弔。」
「この人と手を組みますか？」

「あぁ、利害は一致しているからな」
「こんな面白いものをくれたからな」
《ウィザード……》
「俺は、モルモットを回収する」
「そして復讐する」
「よろしくお願いします。

道満さん」